

---

# 勇者ですか？ いいえ、過負荷です

紅の雲雀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者ですか？ いいえ、過負荷です

### 【Nコード】

N8213U

### 【作者名】

紅の雲雀

### 【あらすじ】

この作品は「めだかボックス」の設定を使わせてもらっています。

目を覚ましたらそこは異世界で

俺は勇者になってて

魔王退治をすることになって

俺は過負荷なんだけど……

**最初は無力な才能で（前書き）**

おっひさしぶりです

久しぶりの更新ですねー

いやーねー

いろいろ悩んでたんですよ

この作品をupするのか？とかね

まーいつもどおりの駄文ですが  
よろしくです

## 最初は無力な才能で

昔の夢を見た。

まだ幼く無邪気だった頃の。

昔、夢見た理想は、今じゃ無理だと決めつけた幻想。

昔の俺は“諦める”ことを知らなかった。

だから“頑張る”ことしか出来なかった。

でも今じゃ現実を見て“諦める”ことを覚えた。

その代償なのか“頑張る”ことを忘れた。

全て“諦めた”で終わらせ。

全て“面倒くさい”で逃げる。

俺はいつからそんな人間になったのだろうか。

小学校高学年。

俺は仮面をつけはじめた。

嘘という名の仮面を。

作り笑いで“良い人”を演じるようになった。

そうすればみんな仲良しでいられるから。

問題にはならないから。

仮面をつけた生活は続いた。

中学2年生の中盤。

事件が起こった。

『お前の作り笑いが気にいらねんだよお!!!』

俺の作り笑いがバレた。

『面倒くさい人だね。みんな笑っていればいいじゃないか。作り笑いだっていいだろ？ 君は“みんな仲良し”なんて幻想を抱いているのかい？ それは間違ってる。そんな幻想無理だ。絶対一人は作り笑いで“良い人”演じてる。俺みたいだね』



俺は何が起こってるのか、まったく理解ができなかった。

「…………あの」

「まったくどうすればいいんだよ。」

「…………聞こえてますか?」

「あー早く家に帰りたい。」

「…………返事をしてくれると助かります」

「全てがだりーよ、考えるのもめんどいよ。」

「聞こえてますか!」

「ん?」

「今まで気づかなかったけどそこには少女がいた。」

「俺より年下かな?」

「何か用? 俺は今大変な状況で困ってるんだ」

「はう…………すみません…………」

「少女は謝り静かになった。」

「あ、そうそう。質問いいかな」

「はい、何でもどうぞ」

「じゃあ、ここってどこ?」

「ここですか? ここはアクアですよ?」

「アクア?」

「聞いたことがない土地だ。」

「俺が知らないだけか?」

「それって日本?」

「につぼんですか…………?」

「あれ? じゃあ、ここは日本じゃないのかな?」

「まあ、いいや。で、何で君は俺に話しかけたの?」

「それは…………」

「それは?」

「笑いません?」

「ああ、笑わない」

「伝説…………まあ、噂なんです。『光に導かれた勇者が現る』そん

な噂がアクアで広まってるんです」

勇者？

RPGか何かか？

「それでついさっき一筋の光がここに落ちてきたんです。それが貴方です」

わー、俺が勇者？

「ざっけんなあー!!」

「はう!?!」

「ああ、すまん。で、俺がその勇者だと？ それでこの世界には魔王がいて僕がそれを倒すのか？」

「凄いですね……………」

やれやれ……………僕はベタなRPGの世界に来たのか…………。

「でも残念ながら、俺には勇者の素質なんてないよ」

だって過負荷マイナスだからね。

「でも噂……………」

「所詮噂、俺が勇者だっていう証拠はないでしょ？ 諦めは肝心だよ」

「でも貴方が光と共に来たのは事実です。私はこの目でしっかり見ましたから」

「だから」

俺は話そうとしたら、足音がした。

一人じゃない数人……………いや数十人の。。

「……勇者さままだあああああ!!!!」

「(ビクっ!)」

彼女はビククリしたのか体をビクつかせた。

「野郎ども、勇者様を街まで案内しろ!」

「……はっ! イエッサー!!」

「何だ!? 何をするともりだ!」

俺は男共に捕まってしまった。

「これから勇者様をお城まで連れて行くんですよ」

「はあ！？ 何を言っているんだこいつ等は！」

「うわあああああ！！！」

「俺は抵抗することが出来ず、連れて行かれた。」

「あ、勇者様……お名前を聞けませんでした……」

「手荒な手段で連れて来てしまつてすまん。ワシがこのアクアの王様じゃ」

「RPGにいそつな王様だ。」

「冠をかぶり、赤いマントみたいな物を身につけ、白いひげだ。」

「さつそくで悪いんじゃないが。魔王退治をしてくれないかのう」

「……何を言つてる糞ジジイ」

「貴様こそ何を言っている！」

「まあ、落ち着くのじゃ。いきなりの事で戸惑っているじゃろつ。」

「答えは明日でよい。今日はここに泊まっていきなされ」

「俺を無視して話を進んだ。」

「ああ、RPGの主人公もこんな感じなのだろうな。」

「豪華なのな」

「そこにはテレビや漫画でしか見たことがない料理フルコースがあつた。」

「遠慮なく食べてくれ」

「遠慮も何もこんなに食べねえよ……。」

「いったい何人前だ……？」

「ちなみに魔王退治をしてくれるのなら、こついつ暮らしを約束するぞい」



悪くないかも、って思ってる自分もいるけど。

俺には魔王を倒す術がない。

もちろん勝つ術だつて。

俺は過負荷<sup>マイナス</sup>、勝てるわけがない。

そもそも勝つのはとうの昔に諦めた。

「王様よ。俺一人で戦うのか？」

「いや、もちろん仲間が手配してある」

「ほー、それは使えるんだろうな」

「もちろんじゃ」

「じゃあ俺の代わりにそいつ等を行かせな」

「それは無理じゃ、勇者であるお主が行かねば魔王は倒せぬ」

「だから俺は勇者って呼ばれるほど凄いやつじゃない。それに一人で状況が良くなるんだつたら、俺は神か何かか？」

「そうじゃな。お主は神に選ばれし者」

「じゃあその神の目は節穴だらけだ。眼科に行くことをお勧めするぜ」

「でも挑戦するだけ挑戦したらどうかのう？」

「残念ながら命が惜しいのでね」

「お主は偉いよ」

王様はいきなりしんみりした。

しんみりっていうか真面目になった。

「前に呼び出された勇者は選ばれただけで浮かれ、魔王の前では一撃で死んだ」

「それじゃソイツを選んだ神はクソだな。っつーことで俺も一撃で死ぬと思うぞ？」

「でも君は落ち着いている」

「ただ状況が飲み込めないだけだ。いきなり異世界に連れてこられて」

「むづ。異世界とな」

「何が気になるんだ？」

「君は異世界から来たと言ったな」

「ああ、言ったな」

「！？ 例外じゃ。普通はこの世界の住人で勇者が決まるのに。お主は異世界から……異例じゃ。もしかや本物の勇者かもしれん」

……異世界から来るっていうほうが王道だけどな。

「お願いじゃ！ 魔王を倒してくれ！」

「おいおい……土下座までするか？」

「仕方ない諦めるか……」。

「おい、顔を上げる」

「それじゃあ」

「条件がある」

「叶えられるなら」

「まあ、仲間だな。それと僕に防具、それと武器をくれ。丈夫で強いやつ。それと書齋みたいなのはるか？ この世界の情報がいっぱい書いてある」

「ああ、それだけでいいのか？」

「もちろんだ。まあ、勝ったあかつきには金とかも貰う」

「それぐらいお安い御用じゃ！」

「交渉成立……」

「じゃあ、俺はここに引きこもるから、魔王退治は数日後ってことで」

俺はさっそく書齋に入った。

この世界のことを調べるために。

まずは……この本か。

えーと『勇者になるための本』。

……………これはいいや。

次々……………『魔王の倒し方攻略本』

これで倒せたら勇者はいりません。

「これだ」

『子供が学ぶ歴史』

これだったらこの世界に来た僕でも理解は出来るだろう。

この世界は三つの勢力がある。

その三つの勢力はよく争っていた。

その争いの中で生まれたのが“魔法”や“魔術”。

そうだった、まか不思議な能力だ。

その不思議な能力が生み出されたと同時に“魔物”が発生した。  
いったいどこから現れたのか。

今でも不明。

でも“魔王”と呼ばれる者が引き連れることだけは判明。

今では三つの勢力が手を組み魔王退治をしている。

大まかに読んだけど、大体のことは分かった。

……………男の子なら分かってるよね。

魔法か。

使いて。

めっちゃ使いて。

俺は本を読み終わると同時に王様のところへ向かっていた。

「（バンッ！）」

ドアを豪快に開け王様を呼ぶ。

「な、何事か!？」

「いや、大した用事じゃないけど。一つ頼み事がある」

王様と話していたのだろうか女性3人が僕を見てる。

そのうち一人は見たことがあるような……まあ、いっか。

「王様を俺に魔法を教えてください」

「魔法とな？ まあ、いいじやろつ。お主の世界には無かったのかのう？」

「ああ、なかった」

「まあ、落ち着くのじゃ」

何を落ち着けというのだ。

魔法が、魔法が使えるって男の子の夢だぞ。

俺はずっと前に諦めてた……というか現実を見て魔法なんてないって決めつけたけど、この世界にはあるんだぞ！

落ち着けるか！

「その前に自己紹介じゃ」

「ん？」

「私ミラン・グリフォードです。以後よろしく」

「???? あー、よろしくお願いします」

なぜ敬語になったのかは置いて、凄い美人さんだ。

モデル体系とでも言うのだろうか？

長い黒髪も似合ってる。

それでいて殺気を放ってる。

たぶんこれのせいで敬語になったのだろう。

「わ、私セイリア・イーセスです。よ、よろしくおねがいしまふつ。

あ、噛んじやいました……」

こちらは結構背が低めの優しそうな女の子。

ん……。

「会ったことある？」

「え！？ 忘れたんですか？」

「ああ、物覚えが悪いからね」

「ほら、昨日草原で話したじゃないですか！」

あー、はいはい。

思い出した。

「最初に俺を勇者って言った子か」

「最初が分かりませんが、たぶんそうです」

ほー、あの子か。

「ねえねえ、ボクだけ自己紹介をさせないのかな？」

「あ、ごめん」

「いいよ、ボクの名前はエミリア・セシル。一応男だからよろしくね」

「……………」

「……………」

「……………」

ボクとセイリアもちろんミランを含む三人は黙り込んでしまった。

そしてミランから感じてたオーラはまったくくない。

「……………」

「……………」

「それがどうかしたかな？」

「たぶん俺達一緒のことを考えてるね。」

「ま、まあ、よろしく」

「男同士よろしく」

顔はどう見ても女の子。

背はセイリアと同じくらい……………。

男の娘……………？

「まあ、脱線したけど。魔法教えてくれっ!」

「教えるとしてもワシじゃなくて、彼女達じゃよ」

「へっ?」

「魔王退治のメンバーじゃよ」

「っつーことらしいです。」

他人事みたいに言うな?

いやいや、他人事だし。

だって俺役に立たないし。

全て三人任せろし。

「じゃあ使えない勇者ですが、よろしくお願いします」  
マジで使えないから本気で頭を下げる。

「いやいや、そんな謙遜されなくても」

セイ（セイリア）がフォローしてきた。

「残念ながら俺は魔法すら使えないんだ」

「で、でも……」

「ちなみに元の世界でも勝ったことなんて一度も無い」

「あのおう、王様」

「何じゃ？」

「本当に勇者はこの人なのでしょうか？」

「勇者じゃよ、ワシの直感がそう言っておる」

「そうですか……」

「いやいや、本当は勇者様強いんですよ？ 魔法抜きで」

「魔法を抜いても俺は弱いぞ？ 犬にも勝てないからな」

「勇者様ひ弱です……」

「あ、勇者様とかお堅いのなしね」

「じゃー、って名前は？」

「あ、そういえ自己紹介してなかったな。俺の名前は桜島幸路」

「さくらいゆきじ？ 珍しい名前だね」

「そうか俺達の世界じゃ普通だけだな」

「じゃあユークンよろしく」

「そのユークンって俺のことかな？」

「ちなみにセイリアはセーちゃん、ミランはミーちゃん」

「ゆ、幸路さん、よろしくお願いします」

「では、私は幸路様とお呼びしますね」

「結局さまは付けるんだね」

あ、そうそう。

「じゃあ、さつそく魔法を教えてください！」

「ええ、いいですけど。私は教えることが出来ないのですこちらのセイリアに聞いたほうがいいですよ」

「ボクも教えるのは無理かな？」

「わ、私ですか？ 自身がありません……」

「大丈夫だよ、自身を持つて」

勇気をつけさせるためセイの頭を撫でた。

「はう……」

何かセイって妹って感じがする。

んでミランが姉。

エミ（エミリア）は……弟？ 妹？ どっちだ？

「魔法は簡単ですよ。だからこの世界の人なら無意識に魔法を使うことが可能ですね。幸路さんにとって難しいか分かりませんが」

あれか？

日本人が日本語を覚える。

でも途中から英語を覚えようとすると難しい、みたいな？

ちなみに俺は英語が凄く苦手だ。

「まあ、最初は基礎魔法を勉強しましょう」

「？ 勉強すれば使えるの？」

「まあ、そうですね。頭で理解しちやえば簡単です」

「んで、この本を読めばいいと？」

「そうです」

むう……何でこの世界の文字が日本語なのか？

そういうツツコミは止めておこう。

まず目に入ったのは『炎弾』『水弾』『雷弾』。

まあ、そんな“何か”を打ち出す魔法。

あとは『回復』『攻撃力強化』『防御力強化』。

補強能力だな。

ちなみに無意識で回復する能力もあるらしい。

んー、何を覚えよう。

「なあセイ」

「ふえ？ セイって私のことですか？」

「ああ、オススメの能力つてあるか？」

「オススメですか……これなんてどうです？ 初心者でも簡単に覚えられますよ」

「じゃあこれを練習しようかな」

「あ、あのう」

「ん？」

「これプレゼントです……」

顔を赤くして、もじもじしながら俺に渡してきた。

……石？

「それは魔法石ですね。自分の魔力を倍増するための石です。よい物だと200万とかしますよ」

「ほー、ありがとうございます」

「はう……」

ありがとうの印に頭を撫でた。

「炎の玉のイメージ……」

イメージ……イメージ……。

……。

「イメージ出来んっ！」

「はうっ！」

「あ、ごめん」

「いやいや、よかったらお手本を見せましょうか？」

「ああ、本物を見せてもらったほうがイメージしやすい」

セイは杖を持って立ち上がった。

「ん？ 杖つて必要かな？」

「いえ、私は魔法や魔術を専門とする魔術師ですから。剣とか苦手なんですよね」



魔法や魔術ね……。

って魔法と魔術ってどう違うんだ？

まあ、その話はいいや。

「それで魔力をあげる杖を使ってるんですよ」

「ふん」

俺って何の武器を使うのだろう？

「じゃあやりますよ、見ててくださいいね」

そういうとセイは前を向き、手を前へ突き出した。

次の瞬間、炎の弾が一瞬にしてできた。

「このような炎をイメージして……次は飛んでいくイメージです」

すると炎の弾は遠くまで飛んでいった。

「こんな感じで大丈夫ですか？」

「おおー」

俺は拍手をする。

生魔法だぜ……。

カッコいいね！

「じゃあ俺だね」

イメージ。

さっきのセイのイメージだ。

全てを燃やす紅蓮の炎。

「！」

でた！

サイズはセイより小さく、手のひらサイズ。

でも感激だ！

「お、呑み込みが早いですね。流石幸路さんです」

今日は『炎弾』『水弾』『無意識自然回復』『攻撃力強化』。

炎弾・水弾は手のひらサイズだけど使えるようになった。

無意識自然回復は、まあ、無意識的に自然回復するって魔法だね。

まだ意識的には無理だ。

次の日。

魔法の勉強をした俺はミランとエミと一緒に武器を選んだ。

「んー、俺ってどの武器も使ったこと無いんだよね」

因みに帰宅部です。

竹刀なんて触ったこともありません。

あるのは修学旅行で買った木刀ぐらい。

「ミランとエミって何の武器を使ってるの？」

「私ですか？ 私は二つの剣です」

「ボクはねーこれだよ」

エミが手にしているのは小刀と手裏剣数個とクナイ数個。

「ボクが得意とする魔法は“加速”だからね」

「ほー」

加速だから小回りがきく小刀ね。

「まるで忍者だな」

「にんじゃ？ 何それ？」

「私も知りませんね……」

「ん。忍者ってのは俺の世界の隠密行動を主体とする集団かな？」

まあ昔の話だけだ

「でもボクは隠密行動なんて苦手だけどね」

何となくは分かってたけどね。

「それで幸路様はどの武器にするのですか？」

「んー迷う……」

「まあ、単純に剣という選択もありますが」

「単純に剣か……」

RPGとかでも主人公は剣だけだよ……ここは違う物を選びたいよね。

とりあえず剣を手にとってみた。

「重っ……」

残念ながらこの重さの物で戦うことが出来ません。

「じゃあこれなんてどうですか？」

ん……銃？

「まあ、ひとまずこれでいいかな？ 使い方を教えて」

「簡単ですよ。この銃に魔力を注げばいいだけです」

「んじゃー試し撃ち」

そこにある大きな壁に銃口を向ける。

「魔力を注ぐと……」

魔力が銃に吸い取られる感覚。

「（ズガンッ！）」

「（メキメキ……）」

「……」

「何で二人とも黙ってるの？」

「い、いや。この壁は頑丈な魔法石で造られてるんですよ。だから魔力を使った攻撃で壁にひびを入れるのは難しいんですよ。できるのはセイリアぐらいですね」

ん、セイ？

「セイって凄いやつなの？」

「ええ、結構な有名人です。魔法を操る人たちの中で最高ランク。

いわば最強ですね」

「マジですか……」

「では魔王退治に行つて来ておくれ」

ここで過ごして二週間。

そんな短い間に修行をして魔王退治。

この世界の魔王は二週間修行すれば倒せる雑魚か？

「んじゃ、いつちょ逝ってくる」

「逝くんじゃないぞ」

そんな会話を済ませ、魔王のいる何とか城に乗り込む。

いや、歩いて三十分って何だよ……。

しかも二週間襲ってこないって……。

本当に魔王か？

そんな疑問がずっと頭の中でループしてた。

「この魔王はバカですが力は強いです。油断しないでくださいね。  
幸路様」

「ああ……」

やっぱりバカなのね。

予想通りなのか、お城の門には武装した門番が二体いた。

「いや、あちらさんもやる気満々だね」

「じゃあ、ここはボクと」

「私にお任せください」

エミとミランが前へ出た。

「ボクの速さについてこられるかな？」

小刀を構えたエミは加速を開始した。

門番はエミの身長を超える大斧を真正面に振り下ろした。

エミはそれを高速で避け、門番の後ろに回り、背中を小刀で刺す。

「ボクに背中を向けたら終わりだからね」

わー、可愛い(?)のに残酷だ！

つつても、この状況そんな事は言ってられないんだよね。

一方ミランはもう一体の門番の相手をした。

ミランは正々堂々と真ん前から攻めてた。

ミランは『攻撃力強化』で自分の攻撃力を高め門番と戦っていた。

大きな斧を片方の剣で防ぎ、もう一つの剣で門番の眉間を刺した。

「敵に容赦ないね。ミラン」

「ええ」

「それじゃあ、セイ。扉を派手にぶっ壊して」

「は、派手ですか？ ……了解です」

セイは杖から物凄い炎をだして扉を壊した。

そして城に入って、とりあえず一言。

「勇者様御一行です。魔王を殺しに来ました」

一応宣戦布告。

相手の家に入るときは挨拶をしなくちゃね。

「ちょ、幸路さんっ！ 何を言ってるんですかっ！」

「ん〜、でもボクはこういうの好きだな〜」

「私はどちらで構いません。どうせ後で気づかれるのですから」

「じゃ、とりあえず乱闘開始っ〜」ことで。みんな頑張っつて勝っつてね。俺は頑張っつて負けるから」

「やあ、魔王」

「何だい？ 勇者」

「一応感想として。人間なんだな」

「いや、僕は魔物だ。人間の姿を借りているだけだよ」

「そ〜なの」

絶対に瞬きを許されない。

した瞬間、相手の攻撃が飛んできて死ぬかもしれないから。

まあ、俺が勝つ可能性は0%に等しいんだけど。

「魔王」

「何だい？」

「お前に質問だが。俺は何に見える？」

「勇者に見える」

そうですか……。

「お前の目は節穴だ。一回めんたま引っこ抜いたらどうだ？」

「最近の勇者は汚い言葉を発するんだな」

「残念ながら綺麗ごとだけを並べても勝てないのでね」

「現実を見ているんだな」  
「いや。俺は現実から逃げてるんだ」  
「ほー、勇者らしくない」  
「そうさ、俺は勇者らしくない。だから俺は勇者じゃない」  
「では、何だと言っただ？」  
「“過負荷”とでも言っておこうか」  
「では過負荷よ。僕の力の前でひれ伏すがよい」  
黒くて黒くて黒い真つ黒な弾。  
「なあ魔王」  
「怖気づいて、命乞いか？」  
「ん、いや諦めたんだよ」  
「む、何をだ？」  
「お前を自分の力で倒すことを」  
「ほほー、他力本願か？」  
「いや、それとは違う。俺の過負荷スキルを使わせてもらう」  
「スキルだと……？ 残念ながら魔法なら聞かない！」  
魔王は黒い弾を俺に向かって撃った。  
「無理無力あやめつ」  
俺の過負荷は“無理無力”。  
相手のやる気無くさせる、絶望させるなどの効果がある。  
中学二年生のときに発動した二つ目の才能。  
そして初めての過負荷スキル  
「これ以上やるつもり」  
「いいえ……諦めた。お前に勝てない……」  
「それじゃあ死んでよ」  
銃口を魔王の頭に向け。  
重いはずの引き金が、軽く感じた。

「いやー！ 流石勇者様！ 魔王を独りで殺してしまっなんて！」

「本当ですよ。幸路さんどんな技を使ったんですか？」

「んー、内緒だよ」

「ボクも気になるなー」

「私も気になります」

内緒にする理由はないけど、一応内緒ってことにしておく。  
んで、流れだと、魔王を倒して、元の世界に返れる。  
ってというのが流れのはず。

「それじゃあ、残りの魔王もよろしく頼みますぞい。勇者様」

「……………ハア？」

「What？」

「因みに勇者様のお城は立てたぞい。だから今日からそちらで住んでくれても構わん。使用人もつけたぞい」

「どうやらこの世界には魔王が何体もいるらしいです。」

「それじゃあ、ボク達もその城で暮らすのかな？」

「そうじゃのう……まあ、それが一番じゃろうな」

「ーことで、その城には俺・ミラン・セイ・エミ住むことになりました。」

残念ながら俺が思ったとおりには行かないね……。

**最初は無力な才能で（後書き）**

[http://profile.ameba.jp/kurena\\_inohibari/](http://profile.ameba.jp/kurena_inohibari/)

アメンバー始めました！

一応毎日更新中！

こっちでは140字小説ばかり書いてます  
気軽にアメンバー申請送ってね？



## 修行のあとはご褒美の

「次こそっ！」

走り出し、両手で握り締めた木刀を前に振る。

その一太刀をミランが軽々と受け流す。

「まだまだっ！」

体制を立て直し、横へ木刀を振る。

ミランは片方の木刀でそれを止め、片方で俺の頭を狙う。

俺はそれをギリギリのところであわして、後ろへ下がった。

「ハアハア……」

息が乱れてる。

そりゃ一時間以上ミランと修行をしているのだから。

今している修行は剣術だ。

ちよくちよく休みながら修行をしてるが、すぐに息が乱れてしま  
う。

それに今まで俺の攻撃はミランに当たってない。

一週間前から。

「幸路様！ 集中です！」

ミラン師匠からの喝。

集中……。

少しずつ息を整える。

「はああっ！」

渾身の一太刀。

でもミランは軽々と避けた。

そしてミランが俺の背後に回り、俺の首に木刀を当てる。

「参りました……」

ミランが俺の首に木刀を当てるといふことは修行終了の知らせだ。

つまり俺の負け。

「一週間前まで木刀すら触らなかった幸路様ですよ。これだけでき

れば上等です」

「お世辞ありがとうございます」

「ゆ、幸路さん。お疲れ様です」

「疲れ」

セイとエミが来た。

そしてセイが俺にタオルを差し出した。

「ありがとう、セイ」

「い、いえ……」

何か恥ずかしがっているセイを見てると頭を撫でたくなる。

これは妹を見る兄の気分か？

「ボクからはこれ」

「お、水か。エミもありがとうな」

「ボクもなでなで」

「はいはい」

この男から女が分からん性別のエミの頭を撫でる。

仕草は女の子っぽいのだが……どっちなんだ？

「こ、これミランさんの分です」

「あ、私の分まで用意してくれたんですね。ありがとうございます」

「もちろんボクも持ってきたんだからね」

ミランにもタオルと水を渡した。

「ふゝ、疲れたー。午後からは魔法か？」

「あ、はい。今日は『回復』が意識的に出来るようになりましょう」

「了解。セイリア師匠」

「師匠なんて……」

また顔を赤くして下を向いてしまった。

「ねえねえ。何でボクだけ師匠じゃないの？」

「いやいや、俺からしてみればみんな師匠だよ。エミリア師匠」

「お礼に『加速』を教えるよ」

「ありがとうー」

そんな感じに午後は終わった。

午後からは魔法の修行。

まず『炎弾』。

一応少しの集中で炎弾を扱えるようになった。だからすぐに炎弾を使える。

「ま、回復は置いといて。これからやるか」

そこに書いてあるのは『電雷獣』。

まあ、雷の獣だ。

難しいけど強い。

つてか本音を言えばカツコいいから覚えたい。

「じゃあお手本見せますね」

地面に魔方阵がでて、そこから雷の獣がでてた。か、かつけー。

「ゆ、幸路さん？ 目がキラキラ光ってますよ？」

いやー、カツコいいじゃん。

現実ばっか見てた俺にとってファンタジーは凄い世界なんだよ。

「んじゃ、これを召喚すればいいんだな」

集中……。

魔方阵。

雷。

獣。

「（バチッ！） （バチバチッ！）」

「いつっ！」

「だ、大丈夫ですか！ 『回復』！」

雷に撃たれた？

「だからこれは難易度が高いんですよ。失敗したら痛いですし……」

「集中力が足りなかつたかー」

「それもありませんが。経験不足かもしれないですね。もっと基礎のと

ころからやりましょうね？」

「まあ、師匠がいうなら……じゃあ……これだ！」

『水龍』。

「ハア……幸路さん。さっきの話聞いてましたか？」

あー、また難易度高いのね……。

「じゃあ無難に『回復』かな」

「そうですね」

午後の修行終わりっ！

とりあえず『回復』は使えるようになった。

「ん、じゃあ、俺風呂入ってくるわ」

「あ、分かりました。ご飯前に上がってくださいね」

「りょーかい」

とりあえずお風呂へ直行。

「んー、いつ見ても広い」

簡単に言つと温泉。

難しく言つと温泉。

間をとつて温泉。

まあ、温泉なみの広さだね。

この前王様にこの城貰つたけど、広すぎだぜ……。

最初らへんなんて道に迷つて泣きそうだった……。

いつもセイの『探索』で助けてもらつた。

ありがとうセイ……。

君がいなかったら俺は知らない部屋で独り死ぬところだったよ……

…。

「ふうー、落ち着く……」

一人で温泉つてあつちの世界じゃほとんど無かつたからな。

あー、のんびりするー。

一人の温泉つていうのもいいなー。

毎日

『さー、男同士一緒に入ろうな』

とエミが言ってる。

『そ、それはダメです!』

という流れで結局ゆっくりできないんだよね。

「(ポチャンっ)」

「!」

誰か……いる。

一応身のために桶を装備……。

「(ポチャンっ)」

「そこだ!」

思いつきり桶を投げる!

ソイツは手刀で桶を弾く。

そして物陰に隠れた。

「ゆ、幸路様! 私です!」

聞き覚える声。

でも今はオドオドしてる。

「そ、その声は……ミラン?」

「え、ええ……」

「な、何でここに……?」

無音の状況に耐え切れないから理由を聞いた。

「そ、それはこっちの台詞です! 私が温泉の入った数分後に幸路様が入ってきたのでしよう!」

「そ、そうなのか……すまん。でもだったら最初に言ってくれればよかったじゃないか」

「い、言おうとしたんですよ。でも言うタイミングが……」

「……………」

「……………」

無言が耐え切られん。

「じゃ、じゃあ、さきにあがりますね……」

「あ、ああ……」

「こ、こっち向かないで下さないね……」

「わ、分かった……」

あー、たぶん顔が真っ赤だな……。

絶対に前が向けない……。

「（カチャンッ）」

ハア…… やつと出た……。

それにしても緊張したなー。

……。

……。

…… ハア。

この後、エミにからかわれて。  
セイに色々追求された。

それはいわゆる才能さ

「『加速』」

エミが小刀で大きなモンスターと戦っている。

高速でモンスターを切り刻む。

最後に強い一撃を切り刻み、モンスター蹴ってモンスターとの間を空ける。

「『雷纏』」

くない数個に雷を纏わせモンスターに投げる。

エミが指を天に向けた。

「『落雷』！」

くないが当たったモンスターに落雷を落とした。

「さっすがエミだな……」

エミの強力な加速の後、雷の連続攻撃。

エミの得意技は加速と雷かな？

加速が得意だってことは分かってたけど。

雷は聞いてなかったな。

「『氷華』」

氷の花があたり一面に咲く。

もちろんモンスターの足は凍らせられて動けない。

「『氷柱』」

モンスターの真下から氷の柱が発生する。

モンスターは宙に浮かんでる。

「『氷花弁』」

氷華の花弁が宙に浮かんでるモンスターに突き刺さる。

氷系の魔法でモンスターと戦っているのはセイだ。

流石と言っべきか魔法に関しては最強だ。

「『攻撃力強化』」

ミランが攻撃力を上げてモンスターに斬りかかる。

続いてモンスターを蹴り間合いを少し開け、蹴った反動でモンスターを真つ二つに斬る。

刀の扱いにだったらミランが一番だな。

「そんじゃ、俺もやるかな」

今日はモンスター狩り。

生態系を崩さないように、害を及ぼすモンスターだけを倒す。

「『炎弾』」

まずは炎弾で怯ませる、そして一気に近づき刀で斬る。

まあ、当然まだモンスターは死なないわけで。

「（カチャッ）」

モンスターの頭に銃口を向け撃つ。

これが俺の戦い方。

魔法で怯ませ、刀で傷をつけ、傷ついて動けないモンスターの頭を銃で撃つ。

「あ、ずっと気になっていたんですけど、いいですか？」

「ああ」

セイが俺に質問してきた。

「どうやって魔王を倒したんですか？」

「私も気になります。武器もまともに扱えてなかったのに……どうやって倒したんでしょう？」

「まあ……裏技かな？」

「裏技ですか……」

「ん〜、気になるから教えて！」

エミも話の輪に入ってきた。

「まあ、隠すようなことじゃないしな」



「俺の才能とでもいうのか。俺は昔から“諦める”ことだけは得意だった。そしていつからか“過<sup>スキル</sup>負荷”っつーもんが使えるようになった。名前を『無理無力』。これを受けたやつは全てを諦める。まあ、魔王にこれを使って俺に勝つことを諦めさせ俺が銃で殺したつてわけさ」

ちなみに心を冷静にしている状態でしか発動できない。

「ほえー！凄<sup>ス</sup>い魔法だね。セイは使える？」

「い、いえ……」

「これは魔法じゃなくて過<sup>さこのつ</sup>負荷」

「幸路様の世界にはそんなものが……」

「そうでもないよ？ みんながみんな持つてるっていうわけじゃないし」

まあ、俺が持つ才能はこれだけじゃないけどね。

「まあ、はつきり言ってしまうえばこれは反則。だけどな俺は使わせてもらおう。だって俺は過負荷だからな」

「ボクはどっちでもいいよ。正々堂々も卑怯も勝てばいいんだしね」

「私も同意権です……」

「私もです」

あら？ ミランって正々堂々っていうイメージがあっただけだな……？

「……それに正々堂々っていうのも好きじゃないし」

「ん？ エミ何か言ったか？」

「え、あ、何も言っていないよ」

何だ俺の勘違いか。

「（バンッ！）」

扉が豪快に開けられた。

ここでは見ない服装……王様の家来か？

「どうしたんだ？」

「申し上げます！ 勇者様がさきほど倒されていたモンスターの親玉が出てきました！ 推測ですがあと一時間ほどでアクアに着き暴

れまわると……」

「そーか」

仇ね……。

「んじゃ、最後の始末をしてきますか」

「了解です」

「わ、分かりました」

「では行きましようか」

馬に乗って親玉のところまできた。

ちなみに馬に乗る練習もしっかりしてます。

「うわー、でっけー」

体長4m？

「腕がなりますなー」

「まあ、楽勝じゃない？」

「セイリアがいれば楽勝ですね……」

「まあな」

セイはもしものためにアクアで待機。

「でも俺を抜かして、二人でもいけるだろ？」

「どうでしょう……私は大型モンスターとはほとんど戦ったことがないですし……」

「ボクもかな？ 大型は珍しいし」

「ん。じゃあ俺も参戦かな？」

「やりますよ」

その言葉を放つと同時にミランは走り出す。

『攻撃力強化』

まずは補強魔法で強化。

「はああ！」

ミランは親玉の足を斬りかかった……が。

「ハア！？ ほとんど無傷か」

「一応様子見として五割の力でやりましたが……無傷ですか……」

それでもミランの5割は強い。

俺との練習は三割ぐらいだな。

「じゃあボクの番！ 『加速』 『雷纏』！」

小刀に雷を纏わせ、高速で親玉に斬りにかかる。

これでも小さな傷しか開いてない。

「ありやりや？ たったこれっぽっち？」

「だな」

「さてどうやって倒しましょうか？」

「まあ、さっそく反則使う？」

「そうしましょうか」

「『無理無力』《諦める》」

親玉は持つていた金棒を落とした。

「これで終わりだ」

親玉の頭を銃で撃った。

「!？」

硬い……。

「それでは私が！」

凄い殺気があたり一面に放たれる。

「『炎斬』」

炎を纏わせた双剣で頭を狙う。

「くっ！」

それでも親玉は死なない。

「さーてどうしたものか……」

俺の過負荷を使ったとしてもこの硬さを変えることは不可能だ。

「ボクがセーちゃんを呼んでくるから、時間稼ぎしてて！」

「了解しました！」

「勇者の底力見せてやんよ」

まあ、力なんてないけど。

「では幸路様は後ろで援護射撃をしてください。私は頭蓋骨を壊します」

「了解だ！」

相手は諦めてるとはいえ、体が硬い……。

まあ、俺は援護射撃ね。

腰から二丁拳銃をとりだす。

「せめて動けなくなるまで足を撃つてやるよ」

『無理無力』には時間制限がある。

確か……一時間かな？

三十分後。

「ゆ、幸路さん」

やっとセイが来てくれた。

「こいつの硬さは異常だ。どうにかならないか？」

「えーと……任せてください。たぶんいけます！」

おお、頼もしいかぎりですな。

「では、『炎爆』」

あ！ そういうことね。

外からの攻撃がダメなら内からね。

セイの炎爆は親玉の口から入り、爆発した。

「まだまだですよ。『紫毒花』」

ん……初めて見る技だ。

倒れてる親玉の目に何かをした。

「今のは毒技です。一瞬で身体中に毒が回ったと思いますよ」

スゲー、流石最強。

俺も過負荷なしで戦えるようにならないとな。

蛙とか蜘蛛とか絶滅しちゃえばいいよ（前書き）

ええ、はい

サブタイトルが意味分らないことになってますね

一応意味はあるんですよ？

小説の中にでています

そして本当に蛙とか絶滅しちゃえばいいんだ！

蛙とか蜘蛛とか絶滅しちゃえばいいよ

「んで、これが今日の依頼か？」

「ええ……今日も頼りにしてますからね」

「まあ、頼りにするなら俺より優秀なメンバーを頼りにするんだな  
俺は歩き出し後ろにいる王様に軽く手を振る。

さて、修行開始。

「えー、今日のクエストは『螺旋城の大蜘蛛駆除』だつてさ」

「っ！」

「ん？ セイどうかしたのか？」

「む、虫は大の苦手なんです……」

「まあ、好きなやつはいないわな」

そういう俺も虫は好きじゃない。

っていうか嫌いだ。

とくに蛙とか蛇は特にな。

「じゃあ、セイ。今回はお留守番するか？」

「い、いえ！ 行きます！」

「そ、そうか？ じゃあ、頑張ってくれな」

「は、はい……」

「ここが螺旋城か……」

まるで蜘蛛の巣だな……。

「この蜘蛛の巣が螺旋状になっていたから螺旋城と呼ばれるようになったんですよ」

「ほー、説明ありがとう。ミラン」

「いえいえ」

さーて、簡単な話セイに頼んで炎系の魔法で焼いたほうが速いだけだ。

本人はびくびくしてて使い物にならない……。

「な、なあセイ。よかつたら今から帰るか？」

「わ、私なら大丈夫です……ぐすん……」

「いや……泣きながら言われても……なあ？」

ミランとエミにアイコンタクト送った。

「たしかに幸路様の言うとおり、無理はよくないですよ？ 誰にでも得意不得意はありますし」

「そ、そうだよ？ ミランも幸路も言ってるんだし。無理しないで帰ろ？」

みんな頑張つてセイを説得中……。

十分後……。

「ハアハア……」

「ゼエゼエ……」

疲れた……説得失敗。

「まあ、いい。やるぞミラン！ エミ！」

「はい！」

「了解！ 『加速』！」

さっそくエミは加速状態になり蜘蛛の巣を斬る。

「硬くはないけど、全部斬るとなると無理だね」

「それじゃ『炎弾』！」

俺の炎で燃やす！

「つち！ 俺の炎じゃ燃えないか！」

「それに大蜘蛛が出てきませんね」

「ん。まあな、まあ蜘蛛の巣を攻撃してれば怒って出てくるんじゃないか？」

「そうかもね」

三人とも刀を手にして蜘蛛の巣を斬る。

「んで、これが大蜘蛛？」

「え、ええ……予想以上です……」

「う、うん。ボクもこんな大きさだとは思ってなかった……」

大きさは前回の親玉を上回る大きさ。

目測で横が8m縦も8m。

足の長さも結構長い。

「おいおい、これは覚悟きめねえとな」

「はい……」

「了解……」

「攻撃開始！」

『攻撃力強化』をしたミランが突っ込む。

二つの剣が大蜘蛛の腹(?)を切り裂き、腹を開いた。

「『雷纏』！」

雷を纏わせたくない数個を腹に向けて投げつける。

「『落雷』！」

エミが必殺の連続コンボを繰り出す……が。

「グオオオオオオオオオオ！！！」

まだ生きてやがる。

さっすが虫だ、しぶとい。

そのまま糸を吐き出す。

糸……。

「きゃっ」

予想通りなのか俺とセイ以外は拘束されてしまった。

「うっ、これ硬いです……」

さっきは普通に斬れたはずなのに……。

「あゝあ、俺だけか……」

どうやって倒すかな……『無理無力』を使おうかな。

そう思ったところで最悪の状態になった。

「ぎゃあああああああああ……！！！」



「どうしたんですか！ 幸路様！」

「蛙が！ 蛙がいる！」

蛙のせいで平常心を保てない。

そのせいで『無理無力が使えない』。

絶対絶命？

「蛙なんて……蛙なんて……」

蛙は大っ嫌いだ。

絶滅しろとも思ってる。

だから……。

「完全に燃えちまえ！」

『無数炎弾』

その名のとおり無数の炎弾が俺の周りに発生。

「一斉発射！」

無数の炎弾は蛙目掛けて飛んでった。

「ふう〜……あ、やべえ……魔力使い果たした……」

魔力は無限にあるものじゃないからね……。

こんどこそ絶体絶命。

大蜘蛛が糸を出し俺を拘束した。

ハア……俺死ぬのかな？

短い人生だったな。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

続いてセイのところまで行く。

セイは大蜘蛛発見後即気絶……。

だからまじかに大蜘蛛がいることを知らない。

そして大蜘蛛が糸を吐こうとした瞬間。

「う……私、何でここで寝て……え、あ、きゃあああああああ

あああああああー……！！！！！」

いきなりセイは起きて、目の前にいる大蜘蛛に驚き、叫ぶ。

「ち、ち、近寄らないでください！」

無数の魔法陣。

それらは大蜘蛛を囲む。

「『魔炎業火』！！！」

それは確か……最上級魔法！

しかもそれを大量に使用……。

こいつはどんだけ最強なんだ。

あまりの熱さなのか大蜘蛛の糸は溶けた。

もちろん大蜘蛛はとつくのとうに黒コゲだ。

「セイ！ 攻撃を中止して帰るぞ！」

「え？ あ……ごめんなさい！」

「いや、いい。俺達は助かったんだ」

「よかったです……」

「それじゃ帰るぞ」

「りよ〜かい」

「分かりました」

今回のクエストでセイがどれだけ最強ってのが十分分かった。セイだけで魔王を殺せるんじゃないだろうか？ とも思った。

## パーティーを抜け出して

大蜘蛛を倒した（ほとんどセイが活躍）翌日、俺達はパーティーに参加させられた。

もう一回言おう。

参加させられた。

俺はこういう派手なのとか華々しいのは苦手なのに。

王様が招待してきて、それにエミが乗っかって、セイとミランを仲間にして、多数決で俺が負けた……。

しかも俺初めてスーツなんて着たぜ……。

この世界はまだよく分からない。

元いた世界と同じようなところがあったり。なかったり。

私服は違うのにスーツとかドレスは元いた世界と一緒に。

電気はないけど豆電球に似た魔道具がある。

料理も日本で見たことがあるやつだ。

「勇者様が主役なのですからきちっとしてくださいね」  
「ハア……。」

このパーティーは大蜘蛛倒した祝杯だそうだ。

だったら俺は主役じゃないじゃないか。

みんなでセイを祝ってやれ。

そう思った瞬間、みんながセイを祝ってるのを想像してみた。

まあ、オドオドして半泣き状態だ。

簡単に予想が出来るな。

「さあ、このドレスはどうか？　かな？」

そう言ってきたのはエミだ。

「どうだって、まあ、可愛いんじゃないか？」

こいつ男だけだ。

「もっと正直になれよ」

「これ以上どう正直になれと」

「いや〜俺の物にしたい』とか『愛してる』とか」

「残念ながらお前が女だったら言ってるよ」

「実は私……女だったんだ。確かめてみる？」

エミは俺の手を取り、自分の胸に手を当てようとする。

いきなりの出来事で俺は対応できなかった。

「……貧乳？」

「いやいや、ボク男だから」

「お前は結局どっちなんだ……女って言うてみたり、男って言うてみたり……」

「ボクは真正銘男だよ？ 今のは演技だけど。ねえ、ドキドキした？ ねえ、ねえってば」

男の胸触って喜ぶやつがいるか……。

ってというのは半分冗談。

まあ、エミは性別は男だけど、容姿は完全に美少女だ。

エミが貧乳だと思えば……嬉しいかも。

エミには絶対にこのことは言わないけど。

「ゆ、幸路さん……」

ゴスロリというのだろうか？

白がベースで少し黒が入ってる。

元いた世界で可愛い子ぶっている奴等と違い、セイは自分を飾らない。

だから可愛い。

「に、似合ってるぞ、セイ」

なぜか俺は言葉がつかえた。

「あ、ありがとうございます……」

「何それ！ ボクとは違う反応だね！」

「いや、だってセイは可愛い女の子だし。お前は可愛い男の子だろ？」

「か、可愛い……」

「ほら！ 幸路のせいでせーちゃんの顔が真っ赤！」

「はあ！ 俺のせいなのか？」

「い、いえ、そうじゃなくて……」

「いーや、幸路のせいだよ。言葉には気をつけるんだね！」

「うーん……いつも気をつけてるはずなのにな……」

「そ、そんなに気を落とさないでください！」

俺らはしばらくそんなバカ話を続けてた。

それでもミランは来ない……。

「なあ、ミラン遅いな」

「うん、そうだね。何かあったのかな？」

「え？ もう着替えを終わってるはずですよ。私と一緒に出てきたんですから」

ん、じゃあミランは何でこないんだ？

もしかして酔っ払いに絡まれたか！

「一応探すぞ」

たぶんミランだったら簡単に対処できてると思うけど。

「んじゃ、ボクあっちを探すね」

「そ、それじゃあ、私はこっちを……」

「じゃあ俺は」

「気持ちばかりですが、勇者様は動き回らないでください」

「うおっ！ ビックリしたぞ、王様」

「それは失敬……」

「でもな……」

「勇者様は今回のパーティーの主役なのですから」

「ハア……分かったよ」

仕方ないから俺は中央に残ることにした。

「勇者様は」

「異世界ってどんな」

「またこんど私が主催する」

うるさいのは苦手だ。  
もちろん質問攻めも。

「無理無力」  
制限時間は一分。

その間に俺は人ごみを掻き分けパーティー会場から出た。

「人ごみは慣れないから好かない……」  
ある程度離れた部屋で俺はのんびりしていた。  
今日は満月だ。

日本だったら月見をするかな？

俺にはそんな習慣がなかったけど。

今日は満月が綺麗だ。

俺は独りという空間で“寂しさ”を感じていた。

たぶんこれはこの世界で知った感情だ。

いつも周りにはセイやエミそれにミランがいた。

最近は楽しいの時間がばかりだった。

だからなのか、あいつ等がいなくなったらと考えると寂しい。

手を伸ばせばそこに人がいる。

でも、いつかあの満月のように手を伸ばしても届かなくなるのか  
と思ってしまう。

俺の中ではいつの間にかあいつ等は大切な存在になっていたよう  
だ。

だから俺は強くなる。

自分を、自分の仲間を守るために。

世界を救えるとは思ってない。

だから自分の手が届く人を守りたい。

たとえ手が届かなくなっても俺はあいつ等を守りたい。

「幸路様？」

「ん？」

着物を着た少女。

大人びた容姿で黒い髪をなびかせ俺の名前を呼ぶ。

「ここで何をしているんだ？ ミラン」

「こっちの台詞ですよ。パーティーはどうしたんですか？」

「すっぽかした」

「予想はしてましたが……」

「ミランこそ、何でパーティーに来なかったんだ？」

「え、あ……それは……」

「それは？」

「着物を着たのは初めてで……恥ずかしくて……」

恥ずかしい……ね。

やっぱりミランも女の子だ。

いつもはきりつとした頼りになる人だけ。

こっぴつ時は可愛い……。

「俺は可愛いと思う。ドレスよりミランは着物のほうが似合う」

「わ、私がか、可愛いですか……？」

「ああ、可愛いぞ」

ミランは顔を真っ赤にして下を向いてしまった。

「なあ、ミラン」

「な、なんででしょうか？」

下を向きながらミランが答える。

「力って何だ？」

俺はミランに問う。

「誰かを傷つけるための力か？ それともみんなを守るための力か？ 俺の経験上から言わせて貰うと正義を語ってる奴等は全員後者だな。悪役は前者。残念ながら俺は前者でも後者でもないんだよ。

俺は自分を守るために力を使う。俺は弱い、弱すぎる。だから俺はこの過負荷で自分を守る。つつつても今は守るべき仲間が出来たんだがな……」

「私の力は」

「

「（バンツ！）」

扉は豪快に開けられた。

「やっと見つけた！ 二人とも探したんだよ」

「そ、そうですよ。パーティー会場では騒ぎになってますよ！」

「そうか、じゃあ行くか」

「そうですね」

「ボクなんて何も食べてないよ」

「私もお腹が空きました……」

「ほらほら、二人ともさっさと歩く」

「はい」

「では急ぎましようか。主役が行かないと騒ぎは落ち着きませんし」

「だな」

こんな日常が続けばいいと思った。

いつまでも、いつまでも……。



僕はやっぱり弱者でしかないんだ

改めて自己紹介。

俺の名前は桜島幸路。

箱庭学園の二年・十三組に属していた。

過負荷は『無理無力』。

黒神めだかに改心させられそうになったとき、なぜか俺は倒れてこの世界に来てしまった。

そしてなぜか勇者になつてしまった。

正義感？ そんなのまったくありません。

世界を救いたい？ 俺がか？ はつきり言つて無理です。

じゃあ何で勇者として戦つてるんだ？ 簡単な話だ。

楽しいからだよ。

RPGの主人公みたくカッコいいからだよ。

俺はあくまで過負荷だ。

あつちの世界じゃ主役どころか脇役にすらなれないからな。

せつかくのチャンスどぶに捨てるようなことはしない。

だから楽しもうじゃないか。

俺が勇者である物語を。

「それじゃあ修行開始つてな！」

俺が戦つてるのはスライム。

理由としては雑魚で俺の修行にもつてこいだから。

「『体力強化』！」

この前覚えた体力強化を使う。

振り下ろした刀がスライムを真っ二つにする。

スライムは飛び散った。

「ふう……疲れたな……」

ざつと数えただけで百体近く倒した。

「そろそろ終わりにするか  
イレギュラー  
異常だ。」

キングスライム。

スライム同士が合体したモンスター。

さっきのスライムの何倍も大きい。

「おいおい……」

キングスライムが空高く飛び跳ねる。

「ちょ、ヤバイって！」

残念ながらここには俺しかない。

俺は本気で走る。

ギリギリのところを避けた。

「『無理無能力』」

過負荷スキルを使い諦めさせる。

さーて、どうやって倒そう……か。

ありえないだろう……。

俺の過負荷スキルが無効化された……？

「つたく、一体何者だ？ このスライムは異常を起こしまくりじゃないか」

またスライムが飛び跳ねた。

俺は走って逃げる。

「ぐあっ！」

だが避けることは出来なかった。

そのまま俺はスライムの下敷きにされた。  
ぐっ！

圧されて力が出せない……。

そのまま、俺は意識を失った……。

「幸路様！」

私が駆けつけた頃には幸路様はキングスライムに下敷きにされた。

ぐつつと拳に力が入る。

私がついて行かなかつたから……。

「みーちゃん、自分を責めるのは止めな。今しなくちゃいけないことは幸路を助けることだよ」

「そ、そうですよミランさん。自分を責めても幸路さんは助かりません……」

「ええ、でも……」

「いいから！　いくよ！　『加速』！」

エミリアが加速状態でスライムを斬る。

でもスライムはすぐに再生した。

雷攻撃をすれば下敷きにされてる幸路様が危ない。

「『炎弾』！」

セイリアは幸路様に当たらないように魔法を放ってる。

「『攻撃力強化』！　はああああああ！！！」

私に力があれば、守れたはず。

力があれば、すぐに助け出し手当てをすることが出来る。

でも今の私は無力……。

ただ無力で何も出来ない、ただの人間。

「なあ、ミラン」

幸路様の幻聴が聞こえる。

朝聞いたはずなのに懐かしい。

とても安心できる声音。

「力って何だ？　誰かを傷つけるための力か？　それともみんなを守るための力か？　俺の経験上から言わせて貰うと正義を語ってる奴等は全員後者だな。悪役は前者。残念ながら俺は前者でも後者でもないんだよ。俺は自分を守るために力を使う。俺は弱い、弱すぎ

る。だから俺はこの過負荷で自分を守る。つつつても今は守るべき仲間が出来たんだがな……」

力……。

私は何で剣を振るう？

敵を倒すため？

全てを守るため？

自分を守るため？

いや、違う。

私は大切な幸路様を助けるため。

弱い幸路様を守るために剣を振るう。

最初は勇者様の護衛だと伝えられ城に呼ばれた。

第一印象は元気な青年。

だけど身近で見ていると違った。

とある部屋。

幸路様が満月の光に照らされてる。

幸路様は全てが終わったかのような無表情。

だけど、どこか弱々しい。

そんな表情。

本当の彼は弱い。

ガラスよりも脆い。

そんな彼を私は守りたい。

彼は私達には見えない何かと戦っている。

私は幸路様を見えない何かから守りたい。

「大切な幸路様を守りたい！」

剣は桜の花弁になり消える。

「スライムごときが幸路様を踏みつけて良いと思っているのか！」

「み、ミランさん……大丈夫ですか？」

「たぶん今のみーちゃんには周りの声は聞こえないんじゃないのかな……？」

私は何も持たないでスライムに近づく。

「私が鉄槌を下してやるう！」

桜の花弁が私の手に集まる。

桜の花弁は一本の剣に変わる。

長さは50mぐらいの剣。

キングススライムなんて簡単に真っ二つにできるぐらいの大きさだ。

「幸路様を踏みつけたことを悔いよ」

私はそれでキングススライムを横から切りつけ真っ二つにした。

「わ……………」

「はわ……………」

「ん？ お二人ともどうかしたんですか？」

「い、いや……………開いた口が塞がらないというか……………」

「何と言うのでしょうか……………」

「凄かったね」

「わ、私もビックリしましたよ」

私もビックリしている。

だって知らない技がいきなりできるようになったんだから。

『幻影夜桜』……………それが幸路様を守るための力。

俺は“俺”であり弱者だ（前書き）

少し時間があきましたが  
どうぞー！

俺は“俺”であり弱者だ

暗い。

暗くて暗くて暗い。

真っ暗な空間。

何の音もしない。

俺だけしかない空間。

どこか懐かしいような悲しいような

そんな空間。

「幸路さん……」

キングスライムが幸路さんを襲ってから三日が過ぎました。

けれど幸路さんは目を覚ましません。

お医者さんが言うには、いつ目を覚ましてもおかしくない、だそうです。

全ては私達が……。

どこが最強ですか！

一人の大切な人さへ守れてないですか！

私は幸路さんの布団をギュッと握り締めます。

「幸路さん……帰ってきてください……」

居心地はいいわけではない。

逆に居心地は悪い。

だけど俺はここにいてしまう。

だって俺には他に居場所がないから。

違う場所に行つてしまつたら俺は絶望してしまつ。

あの日みたいに……。

中学三年生のあの時みたいな絶望が俺を苦しませるだろう。

だから絶望しないためにここいる。

傷つかないで生きるために。

私は幸路さんの手を握る。

その手は温かく冷たい。

温かいはずなのに冷たくも感じる。

そんな幸路さんの手を私は思いつき握る。

幸路さんに冷たさを感じさせないために。

私が幸路さんを暖める。

冷たい氷を溶かすように。

真つ暗なこの空間が消えた。

続いて真つ白な空間に変わり俺の前には大きな鏡が現れた。

『なあ、俺。お前はまだそんな理想を捨ててなかったのか？ 理想

なんて全て幻想だ。絶望する前に捨てちゃえよ』

理想は全て幻想？

『お前だつて分かつてるんだろ？ こんな毎日は続かない。今まで  
もそうだっただろ。希望は絶望へと変わるんだ。その希望が大きい  
分、絶望も大きくなる。お前には絶望してほしくないんだよ』



希望が絶望へと変わる。

『なあ、昔みたいに仮面をつけようぜ』  
仮面……？

ああ、嘘の仮面か。

『嘘をついて自分を守れ、嘘をついて友達関係を作れ。そうすれば  
お前は傷つかないで済む』  
嘘をついて自分を守る。

握っても握っても幸路さんの手は冷たい。

彼の手が体が心が。

彼の全てが冷たい。

彼の氷は簡単には溶けない。

手を伸ばせばそこにいる。

だけど心に触れようとするとその氷が邪魔をする。

「幸路さん、私達はそんなに頼りないですか……？」  
そう呟いた言葉は誰にも聞かれず消える。

『なあ、おい。そこの俺。仮面をつけようぜ』  
差し出される仮面。

戸惑う俺。

俺は今、この仮面に縋るしか出来ないのか？  
自分が傷つかないための仮面。  
俺は今、手を伸ばした。

「ねえ、せーちゃん。もう休んだほうがいいよ」

「次は私達が見ますので」

「私も見てます……」

私は幸路さんが起きるまでここにいます。  
たとえ何年でも。

私を必要としてくれた人ですから。

「それにしても何で起きないんだろう？」

「何ででしょうね……」

魔法の回復を使っても起きませんし。

何をしても起きません。

呼吸はしているので死んではないです。

「起きたくないのかもね」

「えっ？」

「あ、いや、たぶんそうかもな。って。体に問題はないなら、問題なのは精神でしょ？ だから精神がまだ起きたくないって思ってるんじゃないかな？」

「起きたくない……」。

つまり私達に会いたくない。

戦いたくない。

傷つきたくない。

幸路さん、何で起きてくれないんですか？

藁に縋るように俺は仮面に手を伸ばす。  
自分が生きるために。

『そう、それでいい。お前は一生仮面をつけ続ける』  
「やっと仮面を手に入れた。」

「生きるための術を手に入れた。  
傷つかないための仮面を手に入れた。」

「俺は一生傷つかないで済むんだあ！！  
………何て言うと思っ  
たのかカス」

『な、何！？』

「一生傷つかないだあ？ つざけんな！ 俺はここに来て知った！  
仲間を持って初めて知った！ 幸者のやつらは何で仲間のために  
傷つこうとするのか！ 前までの俺だったら知らなかったぜ。いや、  
知ろうともしなかった。だけどな！ 俺は分かった。傷つかずに幸  
せを勝ち取るうなんて無理だ。傷ついて傷ついて……傷つきながら  
強くなるから幸者は強いんだ！」

「これが俺の答え。」

「いつか違う俺に問われた、俺の答え。」

『そうか、まあ頑張れや、過負荷』

「ああ、頑張つてやるさ」

「さっき受け取った仮面を自分の顔につける。」

「そしてありがとうな」

『どうも』

「俺は鏡を壊した。」

「俺の新しい力で。」

「温かい。」

「さっきまでの冷たさが感じられない。」

「起きます………」

「え？」

「んー、おはよー」

「ええ!？」

「? どうしたのそんなに驚いて」

まあ、驚くのは普通だと思います……。

「あ、セイ」

「な、何ででしょうか？」

幸路さんは私の顔を触ってきます。

それだけで私は恥ずかしいので顔が真っ赤です……。

「隈が出来てる……。セイ寝なきゃダメだぞ。はい! 早速ベッドへ

レッツゴー」

「れっつー」

「わっ! きゃっ!」

わ、わわわわ、私は今幸路さんにおんぶされています……。

温かい……。

落ち着きます……。

そう思うと欠伸びが出ていつの間にか寝てしまいました……。

「ほー、俺はそんなに寝てたのか」

セイを部屋まで連れって行ってベッドに寝かせて、違う部屋で三ランとエミと話してる。

俺三日も寝てたんだ。

「その間ずっとセイが看病してたんですよ」

「そうか……。じゃあセイにはお礼をしなくちゃな」

「ですね……」

どおりで隈が出来てたわけだ。

「ボクにはお礼なし?」

「エミも何かしたの?」

「うん、したさ。おでこのタオルとか変えたり、汗かいてたから拭いたり。大変だったんだよ。男はボクしかいなかったんだから」

「はいはい、じゃあエミにも俺をしようか」

「もちろん、ミランもしてたよね」

「え、ああ、まあ、はい……」

謙虚そうにミランは返事をする。

「そんじゃ、明日は街に行きますか！」

「賛成！」

「私も賛成ですね」

「もう、夜なんだから二人は寝な」

「え、あ、はい。では失礼」

「じゃあね」

「ああ、さて俺も自分の部屋に戻ろうか」

……………。

「……………眠れん！」

俺が寝たのはそれから三時間後のことでした……………。

あつちでなくこつちで感じるもの

俺が三日間の眠りから目覚めた翌日。

俺達は城を出て街に来ていた。

「へー、街ってこんな感じなんだ」

レストランや服屋。

あつちの世界と同じだな。

違うところは電化製品の店がないこと、武器屋があること。

「街に来るのは初めてですか？」

「まあな、外はクエストのときしかでないしな」

だからいつか行ってみたいって思ってた。

「じゃあ、何が欲しい？ おじちゃんを買ってあげるよ」

ちよつと冗談を交えて聞く。

「ボクは小刀！」

「で、では私は……新しい杖を……」

「それでは私も新しい双剣で」

聞いたことあるけど……それってかなり高いよね？

「わあ〜、ここが武器屋か」

「ええ、ここらで一番性能がいいやつが揃ってます」

「つていうかボクが欲しいのはここしかないよ」

「わ、私もです……」

まあ、金があったもこの世界にはゲームがないから金はなっくていいし。

それに食事は王様のほうで払ってくれるし。

「じゃあ、みんな選んで」

「……はい」「」

ついでだし俺も買おうかな。

俺がいいと思っただのは「魔炎剣」。  
杖みたいに魔法の攻撃力を上げる剣。  
とくに火系の魔法をね。

それと「波動銃」。

魔力の波動を打ち出す銃。

普通の魔力の弾を打ち出すことも可能。

縦に真っ直ぐに撃てるし横に広がった弾を撃てる（ただし飛距離は長くない）。

俺はこの二つを買おうか。

「あ、あとう」

「ん、決まったのか？ セイ」

「はい、これです……大魔石杖」

ほー、大魔石を使った杖ね。

今の杖より性能がかなり上だから、セイはまた強くなるのか……。

「だ、ダメでしょうか……？」

「いや、いいよ。セイは隈はできるまで俺の看病をしてくれたんだ。そのお礼なんだからこれくらいお安いもんだよ」

「幸路様」

「ミランも決まったの？」

「ええ、この炎氷式の双剣を」

ミランが選んだのは炎の剣と氷の剣。

まあ、魔力を剣に注ぎ込めば炎と氷が使えるってやつだ。

しかもその剣は性能がいいので炎も氷もかなり強いみたい。

「それにしても結構時間が経ったのに、エミリアはまだですか？」

「わ、私は一番最初に選んでくると思ってたんですが……」

「まあ、いいじゃん。まだ時間はあるんだし。まだ見てもいいんだよ？」

「わ、私はいつぱい見ましたから」

「私もです」

「そう」

まあ、俺も結構見たんだけどね。

しばらくエミを待った。

「お、遅いですね……」

「たしかにそうですね……」

「探すか」

「エミリアさんのことだから……小刀のところでしょうか？」

「ああ、たぶんな」

「っていうことで俺達は小刀が売っているところに行った。」

「エミ……っていた」

「何をしているんですか？」

「え、あー、それにしようかなと。眺めてた」

「トランプペットを眺める子供ですか君は。」

「それで買いたいやつはあったのか？」

「うん、まあね」

「エミが指を指したのは神式雷刀。」

「もちろん小刀。」

「それでいいのか？」

「うん」

「では何で遅かったんですか？」

「遅い？ あ、ごめん。決まってたけどずっと眺めてたら時間忘れ

てた」

「えへへ、と舌を出しながら言うエミ。」

「お前は男なのか？ と問い質したい。」

「それじゃ、買っぞ」

「おねが〜い」

「お願いします」

「お、おねがいです」

「全部で八千五百万円です」

「やっぱり高いよね……。」

「はい」



「ありがとうございます。あとプレゼントです」  
指輪？

「これは召喚石で作った指輪です。武器を指輪に登録することで、武器を持っていかなくてもその指輪で武器を召喚することが可能になる優れたものです」

ほー、便利だ。

「ほい」

「わー、指輪だー」

「これはありがたいですね」

「便利です……」

「登録の仕方は指輪に魔力を注ぎ登録の魔力を得られますので、続いて登録の魔力を武器に注げば終わりです。そこで武器が消えますが指輪にしまつてあるので心配しなくてもいいです。指輪に召喚と唱えれば武器を召喚できます。慣れれば唱えなくても召喚できます」

「説明ありがとうございました」

「じゃあ、お昼だしレストランでも行くか？」

「そうですね」

「私もお腹空きました」

「ボクはオムライス」

近くにレストランに入る。

そしてすぐに店員さんが「何名様ですか？」と、あっちの世界の決まり文句でもてなす。

「四名です」

そして店員さんに窓側の席に誘導された。

「レストランってあっちの世界と一緒になんだな」

「そうですねですか？」

「ふ〜ん」

「ああ、まったく一緒だ」

その後、メニューを見て注文した。  
もちろんエミは宣言どおりオムライスを選択した。

「暗くなりましたね」

時は五時。

「ああ、そろそろ帰るか」

「はい！」

「うん！」

満足そうな笑顔で答えるセイとエミ。

レストランのあと服屋さんとか色々なところに回った。

あっちの世界じゃ友達とかいなかったから新鮮で楽しかった。

俺はかなり後悔している。

黒神めだかに早く出会って早く改心していたら楽しい学園生

活を遅れていたのかもな。

後悔しても意味はない。

だから俺はこっちの世界で楽しむことにした。

## 無力な嘘つきだ

「お前らはついてこなくていい」

「で、でも！」

「俺には作戦があるんだ」

「そう仰いますが……」

「次は絶対に成功する」

「まあ、幸路が絶対って言ってるんだし、いいんじゃない？」

「ああ、俺は絶対に負けない」

俺は今からまたスライム狩りをしに行く。

今度は絶対にキングスライムが出ないところへ行くからとセイと

ミランに説得中……。

「俺が信じられないのか？」

「い、いえ……そういうわけじゃないんですが……」

「じゃあ、行け」

俺は無理やり会話を終わらせスライムのところに行く。

「ここか……」

キングスライムは特定の場所ではない。

前回のところは出ないところだった。

「そんじゃ、スライム狩りを開始させてもらうかな」

本音はスライム狩りではない。

「新しい武器の威力試させてもらおうじゃないの！」

俺は剣を構える。

「はああああ！！」

スライムに剣を振り下ろす。

そして他のスライムが俺に向かって突進。

「『火炎屏風』！」

炎の壁でスライムの攻撃を防ぐ。

この技はこの魔炎剣があるからこそ扱える魔法だ。

「『炎矢』!」

そして残った奴等を炎を矢で撃つ。

「そろそろか……」

俺の勘では来る。

によるん。

そんな音が聞こえそうなキングスライムが現れた。

「やっぱりな」

そしてキングスライムの突進。

「残念ながら俺の剣では倒せない……だから弱点は克服させてもら  
った」

「（カチャッ）」

ズガンッ!

波動銃。

「剣で斬っても再生されるなら、波動で中に衝撃を与えてやるっ」

これが俺の弱点の克服。

そして俺は確かめる。

「『無理無力』!」

この前喰らわなかった過負荷スキルを発動させる。

「（ドゴンっ!）」

キングスライムが上に跳ねる。

「つつーことは利いてないらしいな」

俺は過負荷スキルが利いてないのに笑ってしまう。

「あつはつはははははははははは!」

今ので少し確信が持てた。

「それに今、お前は空中で動けないな」

銃をキングスライムのいる真上に構える。

「『一射数波動弾』」

一回の発砲で数弾の波動を打ち出す技。

それを乱れ撃ちだ！

「（ズガンッ）！」

数秒その音が俺とキングスライムしかいない空間に響いた。そして数秒後キングスライムが落ちてきた。

「もう壊れたか。じゃあ本題。見えてるんだろ？」

俺は独り言のように呟く。

いやいや、俺は悲しいやつじゃないからね？

空想の友達なんていないからな？

俺はいると思われる人物に話しかける。

『あらら？ バレていましたか。流石勇者様と言つべきですね』

「まあな、たかがキングスライムスキルごときが俺の過負荷スキルを打ち消せるわけないだろう。だったら俺の過負荷スキルを打ち消せるのは強いやつ…

…魔王だな」

『では、前回倒された魔王は何でその力を打ち消せなかったんでしようね？』

「俺もそこは疑問に思ってたけど、答えは簡単だろ。俺の過負荷スキルを予想できなかった。または弱いだけ」

『流石ですね。どっちも正解ですよ。彼は弱いし、反応できなかった…。でも今回は彼のようになりませんよ。僕は君を調べましたからね。だから貴方の『無理無力』を打ち消せました』

「ほー、魔王つてのは勇者を調べ上げ倒すのか。力づくで倒すつて考えてたよ」

『魔王はそこまでバカじゃないですからね』

「んじやさ。魔王さん、俺と戦おうぜ」

『ええ、こっちもそのつもりでしたし。それに僕は『無理無力』は利かないので』

すると地面が割れた。

そしてカプセルのような箱から眼鏡をかけた男が出てきた。

「では、さっそく死んでください。勇者幸路」

「こっちのセリフだ魔王。まあ、まずは『無理無力』《諦める》」

俺はさっそく過負荷スキルを使う。

「その程度ですか？ 勇者って  
まあ、利かないわな。」

「では、こつちの番です。『土縛』」

土が俺の足を縛ってくる。

ちっ！ 動けない！

「『炎弾』！」

こつちに近づけさせないために炎弾で攻撃する。

「こんな弾、僕には利きませんよ」

「ですよー」

「では、僕も。『土人形』」

土人形……ゴーレムか？

「土に偽りの魂を入れた、僕の最高傑作にお人形ですよ。さあ、遊んでください」

遊ぶならまず足枷を外せ！

それにしても偽りの魂ね……。

試してやろうか……。

「さあ！ 殺っちゃいなさい！」

数体のゴーレムが俺を襲う。

ゴーレムの拳と俺の顔の距離が1cm。

ゴーレムは俺を殴らない。

「な、何で動かないんだ！ 僕の土人形は『無理無力スキル』は利かないぞ！」

「ああ、そうだろうな。だから俺は新しい……いや、最初の才能の強化版『全変転化』を使わせてもらった」

ちなみに強化前は『嘘つきの仮面』。

俺が最初に手に入れた才能『嘘つきの仮面』を強化した『嘘つき道化師』。

「行け！ ゴーレム！」

俺はゴーレムに指示を送る。

「な、何で！ そんなのデータになかった！」

「そのデータは古すぎだ。俺に勝ちたかったら俺以上に過負荷マイナスになれよ」

ゴーレムの相手をして動けない魔王に近づく。

「最期に教えてやるよ。俺の『嘘つき道化師』は俺のための過負荷スキルだ」

俺は拳を握る。

「俺の肉体に嘘をつき、攻撃力を上げる……」

「っ！」

魔王は声にならない声で叫んでる。

「今の俺の力は通常の倍の力だろうな」

そしてもう一度力強く拳を握る。

「死ね」

強く握り締めた拳で魔王を地面に殴りつけた。

地面は俺を中心にして凹んでる。

「俺は無力な嘘つきだ……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8213u/>

---

勇者ですか？ いいえ、過負荷です

2011年10月3日03時34分発行